

---

# 星の王子さま-ma petite fille-

あいぽ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

星の王子さま・ma petite fille -

### 【Zコード】

Z3550D

### 【作者名】

あいぽ

### 【あらすじ】

南青山医科大学の臨床医師野依聰史は、学内の派閥争いにより、大学を追放されてしまう。絶望の中の聰史は、一人の女子高生と出逢い。権威と権力が渦巻く大学病院の白い闇の中で、禁じられた恋が最後に辿り着いたものとは…！

## プロローグ（前書き）

互いに愛し合うという事は  
お互に見つめ合うのではなく  
同じ方向を見つめるものだ

サンテグジュペリ  
『人間の土地』より

## プロローグ

「ねえ先生……。先生も口が沈むのを見るのは好き?」

どうした、急に?」

「星の王子さまはね、夕日を見るのが好きで、寂しい時にはいつも夕日を眺めてたんだよ」

……そつ。

「時にほね、一日に44回も夕日を見た事もあつたんだって。きっと星の王子さまって寂しがり屋さんだったんだね」

「ねえ先生、私が寂しい時には……、一緒に夕日を眺めてくれる?」

……いいよ。

「ホントにーー?」

ああ……本当だ。

「約束だよー 先生ー!」

約束するよ。

君の寂しさがなくなるまで……

僕は、君の横で一緒に夕日を眺めてあげる。

ずっと……

ずっと……

星の王子さま

m a p e t i t e f i l l e

作 あいぽ



< 1 >

冬の夕暮れの西日が、真っ白い壁に囲まれた無機質な部屋の窓から差し込んでいた。

「野依君、君は我が医局に入局して何年だ？」

野依聰史ノヨコサトシは、窓から差し込む夕日が、自分の前に背を向け堂々と立っている男から放たれる後光のよう<sup>に</sup>感じ、その男の声に萎縮した。

「5年です、小沢教授」

「ほお、もう5年も経つのか……」

ついに自分にも來たか。

聰史は心の中でそう呟やき、小さなため息を漏ついた。

後ろに腕をまわし、まるで殿様オザワタケオのように自分の前に立つ男、南青山医科大学第一外科教授 小沢赳夫の派閥作りのとばっちりが、ついに自分の元へもやつてきたと、聰史には容易に予想できたのだ。

聰史が勤務するこの南青山医科大学は、日本でも名門と言われる医科大学であり、さらにその中でも、この小沢率いる第一外科、胸部心臓外科は、その花形だと世間からは高い評価を得ている。しかし、当の大学病院内では、その花形の医局の教授を、小沢が取り仕切ることに對して、ここ最近、他医局の教授連中らが批判の

声を上げ始めていた。

なぜなら、小沢の出身は南青山医科大ではなく、東北の医科大だつたからだ。

いわば、他医局の教授連中からしてみれば、名門青山の花形医局を外様の人間になど任せているのは、非常に胸くそが悪く、何かにつけては小沢の揚げ足を取り、小沢を潰そうと必死なのだ。

そこで、自分の回りに不穏な動きを感じた小沢は、この第二外科において、南青山出身者を次々と追放してゆき、自分の母校の人間たちだけを入局させ始めた。

それは、自分の医局を自分の学閥だけで固め、この名門と呼ばれる南青山医大に戦いを挑もうとする、小沢の命がけの挑戦であつた。結局のところ、聰史にとつては、自分には全く関係のない、小沢の自分勝手な保身のためだけに、慣れ親しんだこの第二外科から追放されようとしていたのだった。

「野依君。君もそろそろ他の所で自分の技量を広げてみないか?」

やはり、自分も追放か……。

聰史の予想は、やはり的中した。

聰史は、こんな時、いつも自分に勇気があればと思つ。

メスを握らせれば、誰もを圧倒する技量を持つ聰史だが、それ以外はもっぱらダメなのだ。

幼少の頃より内気な少年だつた聰史は、人間関係をつくるのが下手で、同じ医局内の医師連中のように教授におべつかを使えなれば、どのように自分の感情を出せばいいのかもさえも分からぬ人

間だった。

そう、聰史は「イヤなものはイヤ」とは言えないし、「好きなものも好き」とも言えない人間だったのだ。それは、まるでどこか人間的な部分が欠落しているようだった。

だから、聰史にとつて癒しの場はオペ室だけであった。

そこは、聰史にとつて、煩わしい人間関係から解放され、麻酔にかけられ感情を失った患者とだけ向き合えばいい場所だったから。

彼らは、喋らなければ笑いもしない。

人間関係を作るのが苦手な聰史にとって、彼らにメスを入れるときだけが、誰かと自分が繋がっていると、『自分は一人ではないんだ』と実感できる瞬間だったのだろうか。

聰史にとって、彼らは自分の寂しさを癒してくれる、唯一の『友達』だった。

そして、この名門と呼ばれる南青山の花形でもある第二外科において、聰史は、自分自身も知らない間に、天才的なオペ技術を身につけてしまっていた。

しかし、大学病院で生きてゆく医師たちにとって、聰史のような優秀なオペ技術などは、一切必要とはしなかった。

大学病院で生きる医師たちの世界とは、患者の様態より、自分の属する医局の教授の顔色を伺え、人間関係を作る事が上手い連中だけが勝ち残ってゆく世界だったのだ。

「野依君、私は何度も見学させてもらったが、君のオペ技術は非常に素晴らしい。……そう、まるで昔読んだ『ブラックジャック』のようだ」

「……恐縮です」

「しかしな、野依君。大学病院には、『ブラックジャック』などは  
必要ないんだよ」

今まで背を向けていた小沢は、ぐるりと聰史の方に顔を向け、鬼  
のような形相で聰史を睨み付ける。

「私は、これからのが第一外科に必要なのは、切つたり縫つたり  
する技術力ではなく、綿密な研究の上に重ねられた、革新的な『医  
学』なんだと思うんだ」

「…………」

「はつきり言うが、君のようなメス屋はもう第一外科にはいらん。  
これからのが医局に必要なのは、新しい『医学』への研究と挑戦  
なんだ！だから私は、君の代わりに母校から新しい人材をここに  
入局させようと思っている」

小沢の言葉は、聰史にとつてこの上ない侮辱だった。よつによつ  
て、教授が医師に向かつて『メス屋』とは。

しかし、聰史はただ唇をかみ締めるだけで、情けないほど何も言  
い返す勇気はなかつた。

自分はこの手で、何人の命を救つてきた。

医師としてのプライドや誇りは人一倍あるはずなのに、聰史には  
それを表現する方法が分からなかつた。

「……僕は、これからどこの病院に行けばいいのでしょうか

教授に歯向かえない自分の勇気のなさに、嫌氣をさしながら、聰史は搾り出すような声で呟いた。

「次の君の勤務先だがな……」

「……！」

一瞬、聰史は自分の耳を疑つた。  
自分の前にいるこのふてぶてしい男の言葉に。

「野依君、君の次の勤務先だが、表参道女子高等学校へ行つてくれ  
たまえ」

「高校！？」の男は、どじこまで自分を侮辱すれば氣がす  
むんだ。

聰史は、じどうもどりになりながらも、全身の勇気を振り絞り、  
小沢に異議を申し立てた。

「小沢教授、僕は、僕は外科医です。どじこして高校の校医になど…  
…」

しかし、小沢は、そんな聰史の言葉など力強く吹き飛ばす。

「野依君、君に拒否することはできないよ。もし断れば、君はどじ  
の病院にも受け入れてもらえないよう在我が手を回してやるからね」

「……」

「言つただろ。」それからの我が医局に必要なものは、技術力ではなく『医学力』だと、

小沢は、机にあつた一冊のレポートを手にして、それで聴史の肩をポンと叩いた。

「まあ、校医でもしながらゆつくり勉強でもしたまえ」

そして、小沢はそつ聴史に告げると、そのレポートを手渡した。

”Port access surgery”

「……これは！？」

「ポートアクセス法。君も知つてるだろ。胸部心臓外科に於いて革新的な手術法だ」

「……はい。我が医局では、それによるオペはまだ1例もありません」

「そつ。1997年以降、欧米を中心に広がり、今では6000例近くのレポートが上がつてゐる。……しかし、残念ながら日本国内で、それを扱えるのは数少ないのが現状だ」

「……」

「日本では、唯一その先頭を切つてゐるのは慶應医大で、様々な取り組みの中で、ポートアクセスに関しては今のところ権威であると言われてゐる……」

「おっしゃる通りです」

「野依君！……私は、我が医局が日本の医療界のトップでありたいんだよ！ 分かるだろ？ 日本に名門は一つもいらないんだ。もし、我が医局で、これを扱う事ができれば、間違いなく次の学長選は、私にとつてのプラス要因になるだろ？」

「…………」

「まあ、女子高にでも行つて、君はポートアクセスについてゆつくり研究でもしてくれたまえ。その間、私は母校の人間を揃え、来るべきオペに対し、準備でもしておくれよ」

小沢は、聰史の目を見つめ静かに微笑んだ。  
聰史にとつて、自分に向かい不敵に笑う小沢の眼差しは、まるで権威と権力に取り憑かれた悪魔の眼差しのように見えた。

「なあに、君は優秀な外科医だ。来るべき時期が来れば、ちゃんと私の医局に戻してやるから、それまで少しの辛抱だ」

小沢は、聰史の肩をぽんと叩いたあと、聰史を残して教授室から颯爽と出ていった。

小沢は、自分が求めるのは『技術』ではなく『医学』だと言つた。それはつまり、小沢という人間は、できるだけ早く他医大より革新的な論文を多くあげ、どのように自分の権威や権力を築き上げてゆくかという事しか考えていない人間だったのだ。

しかも、自分の権力を守るために、研究のためという大義名分で、南青山出身の聰史を、自分の医局からだけでなく、他の医療現

場からも追放しようとする、まさに豪腕を振るう男であった。

真っ白く無機質な部屋の中で、窓から差し込む赤色に染められた夕日が、絶望の中に包まれた聰史を容赦なく照らしていた。

<2>

教授からの不当な人事を受けた聰史は、大学病院内の一階のロビーで、独り佇んでいた。

ロビーにある受付では、もうすぐ診療時間も終わろうとするにも関わらず、まだかまだかと名門青山での診療を待つ患者で込み合っていた。

人々は病気や怪我をした時には、それが『命』に関われば関わる時ほど、名門という名の大学病院にすがりつこうと必死になる。しかし、当の大学病院の医局内では、『命』さえも預けようとがりつく患者たちを、自分たちの権威と権力を築き上げるための、医学研究の材料としか見ていない。

聰史は、ロビーに埋め尽くされんばかりの患者たちを見て、それを少し哀れにも感じた。

あなた達が思う程、大学病院といつものば、あなたたちの『命』を尊く思つてませんよ。

人は、自分が絶望の淵に立たされた時、自分より不幸な人間を見て、自分はまだ幸せだと思つてしまふ。聰史にとって、受付に並ぶ患者たちは、まさに不幸そのものだった。

同時に、人の『命』といつものを担う医師といつ自分に嫌悪感さえ覚えてきた。

自分は、一体なぜ医師になつたのだろうか？

自分は臨床医として、様々な『命』と戦つてきた。

しかしそれは、生きている人間と関わる事が苦手な自分が、麻醉にかけられ、感情を失つた患者と関わる事によって、失つていったアイデンティティを取り戻す事ができる唯一の時間だったからなのではないのだろうか？

結局のところ、権威と権力に取り憑かれた教授連中が患者たちを医学の研究材料にしか見ていないのと同じように、自分のオペも、患者の『命』を考えるのではなく、自己満足を満たすためだけの極めて自己中心的なものだったのではないのだろうか？

聴史は、もう何もかもが分からなくなってきた。

まるで、果てしない砂漠に一人で取り残され、どうしようもなく迷いさまよい続けていたようだった。

その時 。

ロビーに独り佇む聴史の前を、黒髪の少女が足早に横切ろうとして、聴史と肩をぶつけてしまった。

肩よりすこし長く、真っ直ぐと伸びた少女の髪は、風に揺られ、聴史の顔の近くにふわっとなびいた。

聴史は、吸い寄せられるように、その少女の後ろ姿をじばりく見

つめてしまつ。

すると、その少女もそんな聰史に気づいたのか、ゆっくりと後ろを振り返つた。

一瞬、二人の視線は重なり合つた。

その瞬間　聰史は、自分の周りのノイズが消え、その黒々とした清らかな瞳とは対称的に少し寂しげな表情を浮かべていた少女に、何故か吸い込まれていくような感覚を覚えた。

それは、たつたほんの数秒の出来事だつたが、聰史にとっては、『永遠の一秒』とも錯覚するよつた瞬間だつた。

ふと我に返つた時、聰史は自分の足元に一冊の本が落ちていたのに気付いた。さつきの少女が聰史にぶつかった時に、手に持つていたものを落としてしまつたのだろう。

聰史は、足元に落とされていた本を手に取り、少女を追いかけるが、さつきの出来事はまるで夢だつたかのように、聰史の視界からその少女は消えていた。

少女が落とした一冊の本　　それは、サンテグジュペリ作『星の王子さま』

聰史も、幼少の頃に読んだ事がある本だつた。

聰史は、何気にその本を開いた時、まだ高校生くらいの初々しい少女の残り香が、自分の周りを包み込むような感覚を覚えた。

あの時の僕は……  
生きてこるといつよつ

人生という砂漠の中を  
たださまよつて いるだけだった。

……まさにそ

飛行旅行中に

砂漠の上に不時着した

『星の王子さま』

に出てくる主人公のようだ。

未来というオアシスが見つからぬまま  
絶望という名の飢えが  
僕の心を埋め尽くそうとしていたんだ。

## ■お去りの心（一）

< 1 >

新学期の始業式が始まろうとするのに、表参道女子高等学校は、まだ冬休み気分が抜けない生徒たちでざわめいていた。

聰史は、いつも下車する銀座線の青山一丁目を過ぎ、今日は次の駅の表参道で下車して、この女子高へ来ていた。  
結局のところ、聰史は流されることにしたのだ。

きっと時が解決してくれるだろ？

昨日の小沢からの不当な人事に対し、聰史が出した結論は、いわばの思考の放棄であった。

< 2 >

表参道女子高等学校の職員室では、校長の高松秀治が教職員に対して、月並みに聰史を紹介した後、新学期を新しく迎えるにあたり長々と挨拶を始めていた。

「……昨年までの高菜先生が産休に入ったため、今学期から、我校の校医をこちらの野依聰史先生が担う事になりました。そもそも、我が表参道女子高等学校は、大正12年設立以来、『由緒ある日本女子の育成』を理念に、日本を代表するような様々な女子生徒を育成し社会に輩出してきました。その分、我が校は社会からの期待も大きいのであります。そんな中に、我が校の校医として、こちらの野依先生が来て頂ける事は、我校としても非常に名誉なことであ

ります。なぜならば、こちらの野依先生は、かの名門南青山医科大学の胸部心臓外科の臨床医としてじき活躍……」

「ひして、じいの校長も長々と挨拶したがるんだろうかと、少々呆れていた聴史の耳に、横に並んでいたジャージ姿の教職員から、耳を疑うような咳きが聞こえてきた。

「……何が由緒ある健全な日本女子の育成やねん、あほぢやうか」

**ジャージ姿の男**　この学校の体育の教師を勤めている赤城英一アカギエイジは、小柄な聴史が子供に見えるくらい、背が高くがつちりした体型の男だった。しかも、赤城の言葉が関西弁のせいもあって、このお嬢様学校に並んでいる教職員たちとは違い、どこか異質な雰囲気を放っていた。

「……なあ先生、あんたは医者やから関係ないかも知れへんけど、校長なんてもんはなあ、なんやかんや言ひて、あいつらの事なんて全然考えてへんねや」

赤城は、校長の長々と繰り広げられる挨拶には全く耳を貸さず、横にいる聴史に話しかけてきた。

「校長が考へてる事ゆうたら、この学校に対する社会からの評価だけや。そやから、あいつらがどんなに悪い事しても、臭いもんにはフタをして隠すんや……」

「…………」

「あいつらがどう生きてゆくんかなんて、校長をはじめこの教師連中にはどうだつてええ……。大切なんはPTAや教育委員会から

どんだけ自分らが信頼されるかだけや。だからあいつらの心はどん  
どん置き去りにされてゆく。それが今の教育システムや」

赤城の話に、聰史は大学病院の教授やそれに媚びる医局の医師たちとをたぶらせた。

患者の命より、自分たちの出世しか考えない教授や医師たち。

そして、生徒の事より、社会の体裁を優先する学校の教師たち。

「……なあ、そんな風に育てられたあいつらは、どうなると思つ？」

「…………」

「化け物になんねや……」

赤城は、校長をただひたすら睨み続けたまま、横にいる聰史に話し続けた。

「野放しにして育てられたあいつらは、いつの間にか、何が正しくて何が悪いかなんか善惡が分からへん、モラルもくそもない化け物になんねや！」

「…………」

「ええか先生、今時の女子高生つてなあ……、あんたが思つてる以上残酷でしたたかで、ホンマに化け物みたいなヤツばかりやから、注意せなあかんで」

「はつ、はあ……」

人間なんて所詮自分勝手な生き物である事を、大学病院で目の当

たりにしてきた聰史は、どこか人間といつものに対して冷めていた。しかし、おおよそ自分とは全く正反対に、『善』と『悪』について熱く語る、赤城の熱気に押されてしまい、聰史は思わずすっとんきょううな返事をしてしまう。

「モーツ、赤城先生、野依先生！ ちゃんと静かに私の話を聞くよ！」

聰史のまぬけな返事が校長に聞こえてしまつたのだろう、校長はヒステリックに聰史と赤城に注意をした。

聰史たちが注意を受け、長々としゃべり続ける校長の話が一旦止まつた時だつた。

まるでタイミングを見計らつたかのように、職員室の扉が勢いよく開けられ、威勢のいい声とともに一人の女性が入ってきた。

「遅くなつてすいませーん！」

その女性は、いきなり校長に頭を下げたかと思つと、額から流れる汗をぶつきらぼうに手で弾きながら、何事もなかつたように、教職員たちの列に入りだした。

「み……みみみ、水野先生ッ！ 新学期早々遅刻とは何事ですかア！ あ、あああ……あなたは、きょきょ教師としての自覚をちゃんと持つてるですか ッ！」

校長の高松は、禿あがつた頭を茹でダコのように赤くして、ますますヒステリックに怒りだした。

しかし、その水野と呼ばれる教師は、全く反省の色などなく、む

しろ校長を小馬鹿にしたような口調で、「反省してまーすー」と額に右手を当て敬礼するだけだった。

熱苦しい体育教師の次は、全く教師っぽくない軽いノリの女か……。

聰史は少し呆れながら、その女の顔を眺めていた。すると、何故かその女は、急に満面の笑顔で聰史に近づいてきた。

「ああ　っ、のっちゃん！　なんでこんな所にいんのー？　のっちゃん医者になつたんじやなかつたつけ……？」

「……えつー？」

聰史が少し怪訝そうな顔をしていると、その女は笑いながら、聰史の肩をぽんぽん叩いてとても嬉しそうに話しだした。

「もおっ、やだあ……のっちゃん、忘れたの？　ほりつ、前橋一高で一緒に陸上やつてた水野真美よ」

「……あっ、あの水野か？」

なんと、その女は、群馬県前橋市の公立高校出身の聰史が、高校時代に所属していた陸上部で、同じ短距離を走っていたチームメイトだった。

そして、その水野といつ女は、陸上部時代からびいか姉御肌で、友達を作るのが苦手でよく孤立していた聰史を、いつも部活の輪の中に入れたりして、聰史とは同じ歳だったにも関わらず、不器用な聰史の面倒をよくみていた女だったのだ。

「……ひ、久しぶり」

昔を思い出した聰史は、なんだか照れくさくなり、ぶつかりぼつしぶり』ってナニよ、そのぶつかりぼつな挨拶は！ あんたは高倉健かっこいのよ。久しぶりに逢つたんだからもうとテンション上げて喜んでよー」

「…………」

水野は、まるで高校時代にタイムスリップしたかのように、姉御気取りで、だまりこくる聰史の類をつねつたり、叩いたりしてからかい始めた。

「みみ……水野先生！ 何度も言つてるよに、ここは学校で、あなたは教師なんですよー。いい加減に『教師』としての自覚を持ちなさい！」

気がつけば、聰史との再会に喜びを隠せない水野に対し、校長のヒステリックは益々激しさを増していた。

しかし、聰史はといふと、校長に怒られる水野を見て思わず噴出してしまつ。高校の時もいつもすぐ調子に乗りすぎては、教師たちに怒られていた水野の姿を思い出し、なんだか可笑しくなつたのだ。ただ、社会というものの内で、自分と同じように生きてきて、あの頃と変わらぬままの明るさを持つていてる水野が、聰史にとつては少し羨ましくもあつた。



< 1 >

職員室での校長の話が終わつた後、聰史は始業式で集まる全校生徒の前で、自分が新しく校医とし赴任してきたことを挨拶した。しかし、案の定人前で話すことが苦手な聰史は、緊張しそぎて全校生徒の笑い者になつてしまつた。あせつた校長が、「野依先生は南青山医科大の優秀な外科医である」という事を告げ、全校生徒は水を打つたように静まり返つたが、きっと生徒たちの目には「覇気がなく根暗な医者が来た」というぐらいにしか映つていなかつただろつ。

始業式が終わると、担任を持つていらない水野に、聰史は学校の校舎を案内された。

始業式があつた体育館から、学食、グラウンド、図書室や視聴覚室など、おおよそ校医の聰史にとつては入ることもないだろうと思われる学校の隅々まで、水野と歩き回つた。

校舎を案内されている間、二人は高校の頃からの思い出から始まり、高校の卒業後の自分たちの事など色々な話をした。

群馬の前橋一高を卒業した後、聰史は、前橋で小さな診療所を開いている父の意思を継ぎ、一浪の末に南青山医科大に合格して、医師の免許を取得した。その後、父の診療所に戻ることも考えたが、研修医時代にオペの魅力にとりつかれ、そのまま大学病院に残り、第二外科に入局した。

そして、水野は推薦で群馬の体育大学に入学して、そこで陸上に明け暮れながらも、教員の免許を取得した。大学卒業後は、群馬の

高校で講師を務めながらも、五年前、思い立ったかのように東京へ行くことを強く希望し、この表参道女子高等学校の体育教師として赴任してきた。高校時代から短距離で陸上界に名を残していた水野だつたので、表参道女子高側は、彼女を喜んで受け入れた。

「はい、のっちゃん、こじが医務室よ。今日から、こじがのっちゃんの病院になるんだね」

「……病院だなんて、おおげさな。僕はただの校医だよ」

水野は、聰史を医務室に案内すると、感慨深そうに医務室をぐるりと眺めた。

医務室は、これから聰史が使うであろう少し大きな診療用の机と椅子、患者用の回転椅子が一台、奥にはカーテンで仕切られたベッドが2台置かれていた。また、聰史が見慣れた医療用の精密機器も数台並んでいた。

また、そこは校舎の1階にあることから、その窓からは、校門から校舎の入り口に繋がっている並木のような美しい景色がよく見えた。

「へへ、のっちゃんが読んでる本って、やっぱ難しそうな本ばっかだね」

聰史が水野には気にも止めないで、鞄の中から医学書をせつせと取り出し、自分のデスクに並べていると、水野は関心しながら、聰史が机に並べたい医書の幾つかを、手に取りページをめくつだした。

「あれ、これも、のっちゃんの本……？」

数冊の医学書の山の中に、ふと埋もれていた1冊の本に気づいた水野は、それを手に取り微笑んだ。

その本は、先日病院で黒い髪の少女が落としていった『星の王子さま』だった。

「へへ懐かしい、のっちゃんもこんな本読むんだね」

「……水野には関係ないだろ」

聰史は、それを水野から取り上げると、それが今にも壊れてしまうものかのように、大切そうに見つめる。

吸い込まれてゆきそうな黒々とした清らかな瞳……  
そしてそれとは対照的に浮かぶ寂しげな表情……

夢か現実だったのかも分からないような、あの時に聰史が感じた『永遠の一秒』

しかし、それは確かな現実だったと告げるように落とされていた1冊の本。

「水野、学校の案内いろいろありがとう。少し疲れたんで一人にさせてくれないか」

『星の王子さま』をいきなり自分の手元から聰史に冷たく取り上げられた水野は、さつきまではしゃいでいた表情とは打って変わり、一瞬困惑と悲しみ似た表情を浮かべる。

しかし、そんな水野の表情の変化にはまるで気づかない様子の聰史は、窓際の診療用の椅子に腰掛け、『星の王子さま』を大切そうに机の上に置いた。

「はは……、そうだよね。慣れない女子高でのっちゃんも疲れたか。昔から、のっちゃん人見知りだったんで、慣れない他校に試合とかに行つたら、人一倍緊張して疲れてたもんね」

水野は、曇らせた表情を、何とか笑顔に作り変え、聰史の身体をぽんぽんと叩いて、医務室のドアに手をかけた。

「……今田は、のっちゃんに逢えて嬉しかった」

「……ああ」

医務室の扉が小さく音を立てた後、水野の姿は消えていった。最後に水野が残した言葉は、今までの聰史が知っているお調子者の水野から放たれる言葉とは少し違い、どこか切なげで女を感じさせるような言葉だった。

医務室で一人になつた聰史は、窓にもたれかかり『星の王子さま』に感慨深そうに田を通していた。

窓からは、始業式も終わり校舎から校門への美しい並木道を歩く生徒たちの姿が、横目に見えた。すると、並木道を行きかう生徒たちの中に、例の黒髪の少女が歩いているのが聰史の視界に映つた。

なんと、あの少女は表参道女子高の生徒だったのだ。

聰史は思わず追いかけたい衝動にかられ、医務室のドアを勢いよく開き、まっすぐに伸びた廊下を校舎の出口に向かつて走り出した。

「ちよつ、じりりしたのよ、のっちゃん！？」

まだ、医務室の前の廊下をとぼとぼと歩いていた水野が驚きの声を上げるが、聰史の耳には全く聞こえていなかつた。  
ただひたすらと何か駆り立てられられているかのよひに、長い廊下を懸命に走つた。

朝の職員室で……

体育教師が言つていた

生徒の心を置き去りにしているのが

今の教育システムだとしたら

僕の心は

社会といふシステムの中で

いつしか置き去りにされていたのかもしれない。

そして、誰かがその心を拾い上げてくれんじやないかと

ただひたすら時が流れるのを待つている

あの時の僕は……

きっと、生徒たちより子供だったんだ

< 1 >

校舎から校門へ通じる美しい並木道を、聰史はただ夢中に駆けていた。

途中、右に左に周りを見渡すが、『星の王子さま』の持ち主は、この間の時のように聰史の前からまた消えてしまった。

まるで打ち寄せては消えてゆく波のように、聰史がそっと手を触れようとすると消えてゆくのであった。

しかし、聰史はその少女を追いかけながらも、何故そんなにも自分があの少女にこだわっているのかが不思議でならぬ、思わず自分に問いかけをしてしまう。

そんなにも必死になつてあの少女を探すのは、早くこの本を彼女に返したいからか？

イヤ違う、ただ本を返したいだけならこんなにも必死にはならないだろう。

それでは何故そこまで必死になつて、自分はあの幼き少女を探しているんだろうか？

彼女にもう一度逢いたいから？

イヤそれも違う、この本をきっかけに、自分と二十歳くらいも離れた少女に逢つたからって、自分にとつてはどうしようもないし、ましてやそこまでして彼女に逢う必要はない。

ではナゼ、こんなにも必死になつて自分はあの少女を探しているのか！？

聰史は、自分でも何故そんなにその少女を追いかけているか分からぬまま、ただ夢中に駆けていた。それはまるで、身体がかってに走っているような感覚だった。

彼女を見失つた後、聰史は表参道女子高の校門を出て、渋谷へ真っ直ぐと伸びる青山通りへ出た。途中、制服姿の生徒たちが集まつていたファーストフードのお店や、アクセサリーショップ、ファッショングビルなどを隈なく覗くが、探し求める少女の姿はどこにもなかつた。

<2>

結局、少女を探し続けフラフラな足取りになつてしまつた聰史が、渋谷のスクランブル交差点にまで辿り着いた時には、静かに日が沈み辺りは薄暗くなつていた。そして、渋谷の街を彩る街路樹には華やかに灯りがともり、会社帰りのOLや、行き交うカップルで街が溢れる時間になつていた。

聰史は、まるでどこまでも続く砂漠を彷徨つかのように、渋谷の街をふらついた。

パルコの前を通つた時、聰史の視界に、少し寂しそうに一人でしゃがみこむ少女が映つた。

その少女の制服を見ると、彼女は紛れもなく表参道女子高の生徒だつた。

聰史は、その少女に声をかけようと駆け寄つた時、その少女の黒い髪が冬の夜風にさらわれ、聰史の前でそつとなびいた。

「……あ、キミー？」

「……？」

しかし、その少女は聰史に怪訝そうな眼差し向け、すぐさま立ち去ってしまった。

うしろ姿は少し似ていたが、聰史が探してい少女とは全く別人だつた。

その時聰史は思った。

もし、彼女を見つけたとしても、一体自分は彼女になんて声をかけばいいのだろうか？「あなたが落としたこの本を返しに来ました」とも言つべきなのだろうか？

しかし、たつた1冊の本を返す為に、こんな時間まで渋谷の街中を探していくんだと分かつたら、彼女は間違いなく不審がるだろう。

やはり、明日学校で返すのが一番良い。  
自分は、一体何をやつていたんだろう。  
たつた一人の幼き少女を探して……。

聰史は手に持っていた『星の王子さま』に目をやつ、そつとため息をもらした

……聰史の顔の前で揺れた真っ直ぐに伸びた黒髪  
……吸い込まれそうな黒い瞳

……寂しげな表情

気がつけば、聰史の脳裏には、病院で彼女とすれ違ったワシンシー

ンが蘇る。

ん、までよ！？ 黒い瞳と寂しげな表情！？

ふと、聰史はある事に気がついた。

あの時、少女と目が合つてからずっと感じていた違和感。それは、考えれば考えるほど、どうしても『目が合つた』という気がしない事だ。むしろ、それは『目が合つた』のではなく、あの少女に意図的に『目を合わせられた』感覚。

そう考えると、あの時彼女が浮かべた寂しげな表情も、まるで自分が何かを訴えかけるために作り出したのではないかと思えてくる。つまりは、あの時、彼女に感じた吸い込まれてゆきそうな感覚とは、あの少女が何かを訴えたかったがために、すべては彼女が意図的に作り出したものだつたのではないのだろうか？だから、あの一瞬がミステリアスな記憶のように自分の脳裏に焼きついてしまい、身体が勝手にあの少女を探してしまったのだ。

聰史は、あの『永遠の一秒』の出来事について、そのような結論に行きついた。

だとしたら、あの少女は一体……！？

『ええか先生、今時の女子高生ってなあ、あんたが思つてる以上残酷でしたたかで、化け物みたいなヤツばかりやから、注意せなあかんで』

聰史は、今朝の体育教師の言葉をふと思い出した。

いつたい彼女は、ナゼ僕にわざとぶつかつたんだ？

聰史は、色々な事を考えながら歩き続けた。

すると、ちょうどNHKホールの近くにさしかかった時、視界に橢円の形をした大きな黄色い光が見えた。気になつた聰史は、夜空に大きく浮かんだ黄色く輝く光の方向へと走り出した。

それは、まるで夜空に宇宙船でも浮かんでいるように形だった。

渋谷公会堂…?

聰史が辿り着いた先は渋谷公会堂改め、今では『COCOレモンホール』と呼ばれるコンサート会場だった。一年ほど前に、渋谷公会堂が『COCOレモンホール』と名前が変つたのは知つていたが、実際に聰史が足を運んだのは今夜が初めてだった。

そして、夜空に浮かぶ宇宙船のような光の正体は、そこに大きく掲げられた『COCOレモン』をイメージせる、レモンをかたどつたネオンの光だった。

学生時代に良くコンサートに来ていた渋谷公会堂がこんな風に変わったんだと、聰史は感慨深くそのネオンを眺めていた。

ふと、ホール前に広がる広場に目をやると、そこには四人の子供たちが手を取り合つているような銅像が黄色い光に照らされているのが見えた。今夜のコンサートはもう終わったのか、辺りには人がほとんどおらず、そこには見えるのは、その四人の子供たちの像だけだった。

歩きつかれた聰史は、スーツのポケットから取り出した煙草に火を点け、大きく深呼吸した。

星の見えない渋谷の空の下、レモンをかたどる黄色い光だけが静かに辺りを照らしていた。

しばらくして、少し眩しいほど黄色い光にも慣れてくると、聰史は広場中央のその銅像に少し違和感を覚えた。

田を凝らしてよく見ると、そこにある象の子供たちは二人なのだ。

もう一人いるように見えたのは像ではなく、人影だった。

聰史は、恐る恐るそこに近づくと、まるで夜空に浮かぶ宇宙船から降りてきたかのように、黄色い光に照らされて、透き通るように輝く白い肌の少女が、その象の前に座っているのが見えた。

その少女は、肩の少し先まで伸びた黒髪を、ぐるりと巻いた淡いピンクのマフラーですっぽりと覆い、少しうつむき両手をこすり合わせて、息を吹きかけていた。

黄色い光のせいだろうか、その少女のはく息は美しく輝いて見えた。

聰史は、その少女の切なげで愛らしい姿に、思わずその場に立ちつくしてしまう。

辺りには誰もいない薄暗い闇の中、ぽつんと光る黄色い輝きは、一人の影を幻想的に長く映し出した。

そして、冬の夜風がまるで一人を優しく包み込むように流れた時、その少女は自分の前に立ちつくす聰史に気づいたのか、ゆっくり顔をあげて微笑んだ。

「やつぱり来てくれたんだね……」

医師は「運命」という言葉を

たやすく口にはしたがらない。

それは、全ての事象は

「医学」という名の理論に基づいた逆らうことのない結果にしかすぎないとそう考えているからだ。

だから、あの時の僕は……

君との出逢いが

「運命」だなんてこれっぽっちも

思う事などなかつた。

そう、あの時はまだ……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3550d/>

---

星の王子さま-ma petite fille-

2010年10月10日19時10分発行